



大安寺報

名句・名言に学ぶ

レイチェル・カーソン (生物学者・作家)

自然がくりかえすリフレイン夜の次に朝がきて、冬が去れば春になるといふ確かさのなかには、限りなくわたしたちを癒してくれる何かがあるのです。

※リフレイン…くりかえし

厳しい冬もそろそろ終わりを迎えようとしています。やがて雪もすっかり融け、土からはふきのとうが顔を出し、水芭蕉が咲き、梅や桜が花を咲かせることでしょう。土いじりや散歩を楽しみにしている方々は、きつと心がウキウキと沸き立っているのではないのでしょうか？

この季節の移り変わりというものは、人間の思慮やはからいを超えた自然の摂理がなせる技。そしてまた、昼と夜の時間の経過、月の満ち欠けや潮の満ち引きは太陽や月などが関わる宇宙の摂理。私たちはそれらの自然・宇宙の摂理の中で生まれた存在であることとは言うまでもないことです。著名な生物学者であるレイチェル・カーソンは次のように私たちに問いかけています。「人間を超えた存在を認識し、おそれ、驚嘆する感性をはぐくみ強めて

いくことには、どのような意義があるのでしょうか？」と。彼女はこう続けます。「地球の美しさと神秘を感じると、人生に飽きて疲れたり、孤独にさいなまれることはけつしてないでしょう。たとえ生活のなかで苦しみや心配ごとにであつたとしても、かならずや、内面的な満足感と、生きていることへの新たなよろこびへ通ずる小道を見つけてだすことができると思います」。お釈迦様はお悟りを開かれた際に「我と大地有情と同時成道す」と、大自然及び他の存在と共に自分は悟つたのだとおっしゃいました。人間を超えた存在である大自然を認識し、自己一体の境地になられたことと、先の彼女のことはばは共通しています。また、冒頭の「夜の次に朝がきて、冬が去れば春になる」といふ確かさ」という一節は、仏教の根本的な教えである「諸行無常」(全ての現象は刻々と移り変わり、永遠不変ではない)とつながるものです。

私たちの人生においては、様々な苦難が訪れます。しかしながら、明けない夜はなく、止まない雨はないように、出口の見えない苦難ばかりではありません。癒えない悲しみばかりではないのです。大切なのは、「無常」を「感

じる(感覚的にとらえる)」だけにとどまらず、「無常」を「観じる(観察し、自分自身のこととして受け取る)」ことによつて、「無常」を前向きに生きる礎とすることです。自分自身を「無常なる存在」ととらえることは、生きているということに喜びを感じ、「一瞬一瞬を大切に生きる」という生き方につながり、自分自身を愛し、そして、自分自身が生きるこの世界の変化(とりわけ季節の移り変わり)を肯定的にとらえることにつながります。

この春は、刻々と訪れる春の息吹を感じ、私たちが支えてくれている自然に感謝し、そして愛するひとときを大切にしたいものです。

合掌



大安寺の宗旨：曹洞宗 本山：福井県永平寺・神奈川県總持寺 高祖：道元禪師 太祖：瑩山禪師
ご本尊：釈迦牟尼仏 本尊唱名：南無釈迦牟尼仏 (なむしゃかむにぶつ)